



2016年リオデジャネイロオリンピックゲームの総括

2016年9月16日 Ramon Gallego
(IHF PRC)

2016年12月10日現在
競技規則研究専門委員会

はじめに

以下の内容は、リオオリンピックでテクニカルミーティング等で話題にした点である。この内容は次からの IHF 大会の基本となる。自国、大陸で活用し、この話題を各国のチームやレフェリーに共有することを望んでいる。

1. 6枚のイエローカードを示す必要はもはやない

- (a) .イエローカードの使用は、レフェリーが許容範囲を確立するための「道具」であり、「管理的に」チームに対して最大数3枚を使い切ることは良いとは言えない。
- (b) 明らかに即座に2分間退場を判定すべき場面でイエローカードを示しているレフェリーがいる。

2. 後半にイエローカードは使用しない

前項と関連し、後半にイエローカードを使うことは、その「道具」の使い道としては適切でない為、避けるべきである。

3. GKなしでの攻撃(6人or7人)の際のコートレフェリーの位置

コートレフェリーから反対のコート(のゴールレフェリー)に戻る際、最も良い走路はベンチと反対側である。このような位置を取れば、素早い選手交代を妨害することは避けられる。レフェリーは、もしも逆の位置を取っている場合には、位置を交代できる機会を流れの中から見つけなければならない。

4. GKなしの攻撃を始めたときは、TDがレフェリーに注意を促す

IHF の TK や IHF オフィシャルが、ヘッドセットを使用し攻撃チームがGKを下げていることに注意を促すことで、レフェリーがその状況に気付き適切な判定(空のゴールすなわち明らかな得点のチャンスである)をすることを助けることが出来る。「ゴールキーパーがない」「ゴールキーパーはコート外」等、短い文章で伝達する。

5. プレーヤーがボールを得、自陣の6mライン付近からGK不在のゴールにシュートを試みた際の7mスローの判定

競技規則解釈6(c)に規定されているように、GK不在の状況は、相手チームのプレーヤーがそのゴールに直接シュートする機会を得ることができるので、明らかな得点チャンスとして見なされる。以下の2つの状況が一致した時には、ゴールから距離に関係なく7mスローとなる。

①ボールを持ったプレーヤーがゴールに向かってシュートを試みている。

②相手プレーヤーが違反によってこのチャンスを妨害する。

反対に、もしプレーヤーがドリブルをしたり、他のプレーヤーにパスをするなど、GK不在のゴールへのシュートを試みていない場合はGK不在の状況で相手の違反があったとしても7mスローは判定しない。

6. 罰則を与えるよりも、ゼスチャーやボディランゲージを用いながら許容範囲を示すこと ～求められるレフェリーの人間性～

許容範囲をチームへうまく伝えていくことが、ただ罰則を与えて示すことよりもはるかに効果的である。もちろん、選手が許容範囲を超える行為を行えば罰則を与えるべきである。また、罰則が必要である理由を説明するためにジェスチャーを用いるべきである。許容範囲を的確に伝えるために、レフェリーには確固とした人間性が必要となる。

7. 試合開始直後から、IHF審判委員会発行の判断基準をもとにピボットゾーンのコントロールをする

これは過去の大会においても課題となる点であり、レフェリーがゲームコントロールを的確に行っていく上での重要な要素の一つである。ピボットプレーヤーを長時間つかみ続けたり、シャツをつかんだり、引き倒すなどの行為は、許されない典型的な行為である。レフェリーが早く対処すればするほど、このようなディフェンスプレーヤーの違反行為をなくし、うまくゲームがコントロールできる。

8. IHFのTK(SKとオフィシャルと連携して)は試合前のウォーミングアップ中に選手の装具を確認しなければならない

ルールで許されていない装具を身につけているプレーヤーへの対応により、競技の進行を遅らせることがないようにしなければならない。足首や膝、肘のサポーター(固い素材、プラスチック、金属製であれば禁止)、ヘアピン、身体に身に付けるあらゆる金属製のもの、禁止された場所への松やに、シャツやサイクリングパンツの袖の長さや色などが含まれる。

レフェリーも協力するべきであり、もし発見した場合はIHFオフィシャルに通知し、適切に対処しなければならない。

9. チームタイムアウトの時間に厳しく

レフェリーとTDは1分間のチームタイムアウトが終了した後、すみやかに競技を再開する責任がある。50秒の合図が知らされたとき、レフェリーとTDは各チームのミーティングを終了させ、競技を再開するための位置につかせなければならない。

10. 原則として、ベンチの管理はTDの職務である。しかし、直接的な抗議や事象においてはレフェリーがチーム役員や交代地域にいるプレーヤーに対し直接罰則を与えることも可能である。

IHF のタイムキーパー、スコアラー、オフィシャルにより、チーム役員または交代地域にいる選手によるスポーツマンシップに反する行為に対し、罰則を与えるよう依頼された場合、レフェリーはその指示に従わなければならない。

11. リザーブのレフェリーペアはその試合における通信機器の管理をする

リザーブレフェリーの職務に、各試合における全ての通信機器の準備および回収することを含む。(5 つの通信機器、2 人のレフェリー、1 人のオフィシャル、1 人のタイムキーパー、1 人のスコアラー)

12. <新傾向>7メートルスローを行う選手が、ボールを床にバウンドさせたり、ゆっくりとした動きをしたり、またはコート中央に位置を取るなどして、スローを行うことを遅らせる傾向がある。

上記のような新しい傾向の行為は行わせてはならない。また、レフェリーは競技を遅延させないように、スローを行おうとしている選手の行動に注意し、速やかに行わせなければならない。また、繰り返し行われる遅延行為に対しては、その選手に対して段階的罰則を適用する。

13. コートを拭くためのタイムアウトは可能な限り減らし、できるだけ素早く行わせる。

不当な理由のための時間の浪費を避ける。レフェリーはプレーヤーから床を拭いて欲しいというリクエストを全て受け入れる必要はない。いくつかのケースとして床が濡れた場所が、その後の競技の進行に直接影響を与えるものではない場合、中断をせず、その後攻撃が変わった後に拭くことができる。また、プレーヤーが、中断中に自分に有利になるよう、位置を変えたり呼吸を整える目的でレフェリーにタイムアウト要求することがある。

14. 負傷したプレーヤーへの対応～ジェスチャー16を示す前に救助を必要とするかプレーヤーに直接尋ねる。

一方のレフェリーが、タイムアウトの後ジェスチャー 16 (交代地域より 2 名の入場許可) を行うと、負傷したプレーヤーは 3 回の攻撃終了を待たなければならない。したがって、プレーヤーのために、すぐに立ち上がり競技を続けることができるかどうか、あるいはコートの外で治療が必要かどうかを最初に尋ねる。

負傷が明らかであるならば、この行動は必要ない。

レフェリーは、タイムアウトの後に、ジェスチャー 16 の指示が遅れないように、あるいは、あわててゲームを再開させてはならない。このルールの基本精神は、競技の円滑な進行のためであり、プレーヤーがレフェリーからの救護の指示があるまで、コート上で長い時間倒れたままであることを許すという意味ではない。

15. 怪我をしたプレーヤーや、ケガではないプレーヤーがコート上に倒れていても、速攻やクイックスローオフを中断させてはならない。

攻撃側や防御側を問わず、プレーヤーがコート上に倒れた状態で、クイックスローオフや速攻がレフェリーのタイムアウトの判定により中断されてはならない。得点チャンスが消滅するまでレフェリーはその攻撃を認める。速攻が終了した段階で、まだプレーヤーがコート上に倒れた状態であれば、タイムアウトをとり救護を要求することができる。しかし、明らかな得点チャンスの時や明らかなチャンスにつながる可能性がある場面では、タイムアウトを判定してはならない。

16. パッシブプレー～レフェリーは通信機器を用い、パスをカウントする。

両レフェリー間でパスのカウントのミス为了避免するために、一方のレフェリーが、(コートレフェリーが望ましい) 通信機器により、もう一方のレフェリーに聞こえるようにパスの回数をカウントする。

ペア間でこのカウントの方法が一番重要であるが、レフェリー間で方法を確立すること。

指を用いて挙げて、パスの数を示す必要はない。

17. コート上に引かれた新しいライン

写真のようにキーパーの前にある小さな印は、競技規則内で指定されていない余計なラインである。このラインはゴールの中心を捉えており、明らかにキーパーのポジショニングに有利となるものである。そのためレフェリーは、その存在に注意を払わなければならない。

18. キャッチネット

ゴールのキャッチネットは、束ねておくことはできない(ネットはゴールイン後のボールのリバウンドを防ぐものであり、IHF が主催する大会には必須のものである)。これは、競技規則内に記載がないものの、ゴールキーパーに対する注意事項である。

19. 黒色の笛

IHF 大会ではレフェリーは、黒色の笛を使用すべきである。(カーニバルではない)

20. チーム役員に対する失格の判定

チーム役員に対する失格において、全てではなくとも、同じ認識を持っていると考えられる。しかし、新ルールに関するワーキンググループ (IHF New Rules Working Group) は、正式な見解を通達として出すため、リオとドーハにおいて会議を行った。

まずここで重要なことは、2016 年より施行となった競技規則は、チーム役員に関する条項に関して変更はしていないということである。2016 年の競技規則は、2010 年に施行されたルールを基本としており、「ブルーカード」という新しい表現方法を追加しただけである。

競技規則 16 の 6c における失格は、プレーヤーの 3 回目の退場に伴う失格 (16 の 6d) と同様の失格である。これは通常の失格であるが、8 の 6 や 8 の 10 のような振る舞いをした場合、報告書を伴う失格 (レッドカードをあげた後にブルーカードをあげる) とすべきである。

また、チーム役員に対する失格において、8の9と8の10の違いは重要となる。これは、通常の失格なのか、あるいは報告書を伴う失格なのかをレフェリーが判定するための判断要素となる。

< 17に関連 >

